

創刊五周年にあたって

経済学会会長

藤

谷

謙

二

われわれの学会機関誌「立命館経済学」は、いまここに創刊五周年を迎えた。あらためて述べるまでもなく、本誌の前身は「法と経済」であるが、その二十年に近い貴重な伝統を受けつぎながら、発展的に分化・独立して、新たに第一歩を踏み出したのは、昭和二十七年二月であった。

爾来同人一致協力して、学園の発展に呼应しつつ育ててきた若木は、すくすくと成長して、早くも五つの年輪を重ねたのである。いまや本誌も、経済学界の一角に確固たる根をおろすにいたった、ということができよう。

しかし学界の進歩は急速であり、とりわけ経済学の領域における発達は顕著である。しかもそこには世界における二大陣営の対立を反映して、二つの大きな潮流があり、その対決を迫られている。このような情勢のもとにおいて、われわれは一日といえども安きをむ

さばることを許されない。すべて学的良心の命ずるところに従い、微力をつくしてそれぞ
れの問題と取組まねばならない。この場合、われわれの標語は、常に「自由にして清新」
ということではなければならないと同時に、指向するところは、社会の進運に寄与しうるも
のでなければなるまい。かくてこそ、学界にむかつて本誌の存在を主張することができ
てあらう。

われわれの「立命館経済学」の年輪はまだ若い。今後同人相たずさえてこれが育成に励
み、やがてそれが亭々たる巨樹となって、学界に聳え立つ日の速かに到来せんことを念願
して止まない。創刊五周年にあたり、とくに記念号を刊行するゆえんもここにある。